

トーマス・マン『欺かれた女』について

堀内美江

亡命先のアメリカからヨーロッパへ帰還したトーマス・マンが、戦後1952年に書き上げた『欺かれた女』は、当初から様々な論議を呼んだ作品である。時代は1920年代、50歳の誕生日を迎えたロザリーエは、アメリカからやって来た20代の青年に恋をする。やがて閉経していたはずの彼女は再び出血するが、これを激しい恋による若返りが生理を復活させたと有頂天になる。それは子宮癌によるものだったのだが、にもかかわらずロザリーエは、たとえそれが自然による欺瞞だったとしても、やはり自分にとってはそれは善意と恩寵なのだ、と言いながら死んでいく。

この物語は、マンのそれまでの諸作品に一貫していた死という要素を扱ってはいるが、そこからある問題性を浮かび上がらせる訳ではなく、また主人公の最後の台詞の意図するところの不明解さも相まって、発表当時厳しい批判を受けた。しかし他方では、この作品の意義を探ろうとする論文も発表されている。ほとんどの場合、それは文体の分析や、膨大な資料の提示に終わっているが、従来の作者の手法だった語り手と登場人物との間の一定の距離が、この作品には欠けているという指摘が多く見られるのは注目すべきである。当時マンがこの作品について述べた意見を考え合わせてみても、この物語の主人公には、個人として、あるいはひとりのドイツ人作家としてのトーマス・マンの心情が投影されていると考えたい。

マンが若い頃抱いていた老いのイメージは、調和や善意を体現できる人間的完成であった。しかし77歳を越えた今、現実に体験した老いは、苦悩と疲労の狭間で逡巡する精神的苦境だった。『欺かれた女』のロザリーエが死の直前に語った言葉は、死期を予感したマンの、来世へ悔いなく旅立つための自己肯定の告白と理解すべきではなからうか。そこにはもはや死を距離を置いて見つめる理知は存在しない。「死ぬことがなければ（生という）春もなく」、「死は生きるための重要な一部である」という、合理的には進むべくもないこの人間の営みを、『欺かれた女』のなかで作者はその主人公の女性の口を通して語らせたのだと考えられよう。

さらに終生ドイツ人作家としての自己意識を抱きつづけていたマンが、同時に自分はアメリカ市民であると公言する資料を目にする時、疲弊したヨーロッパの市民社会の女性がアメリカ人青年にひかれるというこの物語の構図には、マンの何らかの意図を感じずにはいられない。ふたつの大戦を経て、19世紀的市民社会から民主主義国家へと変貌しなくてはならないドイツの困難な道のりを予期した作者が、愛してやまない祖国ドイツに送る「善意と祝福」の祈りが、主人公の最後の台詞には感じられはしないだろうか。